

「ジョイス戦争」の経緯と その軍事的メタファーの由来について

南谷奉良

2023年10月15日に成城大学・国際編集文献学研究センター主催の下で開催されたハンス・ヴァルター・ガブラー (Hans Walter Gabler, 1938-) 講演会「愛の復活、そのゆくえ—今、ガブラー版『ユリシイズ』の意義を語る」の入門ワークショップで、筆者はジェイムズ・ジョイス (James Joyce, 1882-1941) の『ユリシイズ』(1922)の複数の版の出版史に加えて、1984年に刊行されたガブラー編 *Ulysses: A Critical and Synoptic Edition* (以下、UCSEと略記する) を発端にガブラーとジョン・キッド (John Kidd, 1953?-¹) の間で起こった、「ジョイス戦争」(Joyce Wars) と呼ばれる論争の経緯を紹介した。この論争の詳細な経緯については、チャールズ・ロスマン (Charles Rossman) の論文“The Critical Reception of the ‘Gabler *Ulysses*’: Or, Gabler’s *Ulysses* Kidd-napped” (1989) と100以上の関連文献をまとめた注解付き書誌 (1990)、*Studies in the Novel* (以下、SNと略記する) 誌1990年夏号の特集“Editing *Ulysses*”、そしてキッドに対して批判的な立場をとるジュリー・スローン・ブランソン (Julie Sloan Brannon) の著書 *Who Reads Ulysses?* (2003) を代表として、膨大な数の先行研究がある。論争が起こった原因・背景には幾つかの要因が指摘されているが、まず一つには、英米圏の編集文献学の方法である底本 (copy-text) を第一とする原則に従って1922年初版を重視するキッドと、ドイツの編集文献学にもとづき、草稿群・タイプ稿・校正刷等を総合し「連続的草稿テキスト」(continuous manuscript text) として生成過程を重視するガブラーのアプローチの相違があった。もう一つには、ジャーナリズムによる過熱した報道、私的な会話や書簡、懇親会での議論、噂話といった非公式の情報 (Rossman, 1989, 155)、そして個人的な確執と感情的な対立の表面化が輻輳的に絡み合い、「とてつもなく個人的な」(Wollaeger, 95) 要因が介在した点が指摘されている。上記のブランソンに至っては、その論争が単なる「噂話」に過ぎず、「キッドとガブラーの論争の間、キッドが次に何を言い、何をするかという期待が、実際に『議論』されている本当の問題を覆い隠してしまった」(xi) ことを問題視している。

上記二つの要因に加えて重要なのが、この論争が呼称やレトリックといった言葉の運用によって紛糾していた点である。例えば、2024年にガブラー版40周年を記念して刊行された *Ulysses Forty Years: A Critical Retrospective of Hans Walter Gabler’s Critical and Synoptic Edition of Ulysses* では、商業用プロモーションとして用いられた「決定版」(definitive edition) の呼称が多くの混乱を招いていたことが指摘されている²。また同論集で著作権

1 キッドの生年は公開されていないが、各種報道で記されてきた事項から1953年前後の生まれであると推定される。2025年現在、存命かどうかも含めて近況は不詳。

2 ガブラー自身は自身の版を“a non-corrupted counterpart to the first edition of 1922”と位置づけ、「決定版」という表現は用いていない。このフレーズは1930年代の出版広告に由来するもので、最初に確

の面から論争を振り返るロバート・スプー (Robert Spoo) は、(旧約聖書イザヤ書第2章第4節からの引用とともに)「いわゆる『ジョイス戦争』において奇妙なことのひとつに、1985年以降、なぜ『ユリシーズ』新版への批評が友好的な討議ではなく『戦闘』によって進められねばならなかったのか、ほとんど誰も問い直さなかったことがある。剣や槍[戦時の武器]が打ち直されて鋤や鎌[平時の農具]へと作り変えられることはほとんどなかった」と述べたあと、「出口のないレトリック」を用いるキッドの戦略を指摘している(2024, 175)。実際には、論争中の1990年にこの「戦争」をレトリックの面から分析した批評家エヤール・アミアン (Eyal Amian) の研究があり、UCSEの複雑な校訂記号もつ「開かれた隠蔽」(open concealment)のレトリックとキッドの「制限された暴露」(restricted revelation)のレトリックが噛み合わない議論を生んだことが論じられている。つまり、ガブラー版は判断の根拠となる証拠を提示しているかのように見せながらも、読者にその校訂記号を充分理解させないまま編者の選択を正当化する仕組みを構成しており、一方のキッドは皮肉を交えた大衆受けする筆致で、膨大な具体例を挙げるばかりで全体像を示そうとはしない戦術をとったことで、論争の内容が学術的なプラットフォームから外れ、「議論の実質ではなく互いのレトリックに反応している」(142)側面を生んでしまったというのだ。

本稿では、このレトリックに対する関心から、「ジョイス戦争」という呼称に含められた軍事的メタファーに着目し、その起源と拡散の過程を検討する。この呼称は1985年以降、ジョイス研究内で流通する仮称として用いられ、ときに隣接する軍事的メタファー (eg. 「10年戦争」[Spoo, “*Ulysses and the Ten Years War*”], 「手榴弾をなげる」[Brannon, 121], 「核攻撃を仕掛けた」[Wollaeger, 91]) とともに紙面で拡散されてきたことで、批評家たちが争う「戦場」の残像を現代にまで残しており、実質的な学術的議論を後景化させる機能を果たしている。この問題意識から、第1節ではガブラーとキッドの対立、報道を中心とした出来事をまとめながら、論争の経緯を振り返る(本論巻末には付録として関連年表を付したが、複雑な歴史をもつ論争であるため、詳細は本論冒頭に挙げた先行研究を参照されたい)。第2節では「ジョイス戦争」の呼称の誕生を導いた1985年のワシントン・ポスト紙の記事『『ユリシーズ』をめぐる戦争』(“*The War over Ulysses*”)を再読し、記者ディヴィッド・レムニック (David Remnick, 1958-) が論争を「戦争」に仕立て上げたレトリックを分析する。そして、その軍事的メタファーがレムニックの別の記事“*The Critic’s Battlegrounds*”でも用いられるばかりか、文芸ジャーナリズムの慣用表現の継承でもあることを指摘した上で、その呼称がいわばキッドとレムニックの合作によって生まれ、ジョイス研究者によって補強されてきた表現であることを明らかにする。

認されるのは1932年のオデュッセイ・プレスによる豪華版『ユリシーズ』の宣伝チラシからである。1934年のランダムハウス版もまた、「アメリカ合衆国における唯一真正な版」というジョイスの書簡の文言を引用しつつ、実際には1927年のシェイクスピア版の偽造にもとづいたサミュエル・ロス (Samuel Roth) による誤りに満ちた海賊版を底本としていた。同様に、1936年のボドリー・ヘッド版も「最終かつ決定版」と銘打っていた (Nugent and Slote, 2-3)。

1. 1985-90年代にかけての「ジョイス戦争」の経緯

1984年にガブラー編 *UCSE* がガーランド社から全3巻で刊行された。左ページには草稿やタイプ稿、校正刷、初版などの諸資料を照合し、ジョイスの書き換えの過程を示した異文＝対照校訂本文 (synoptic text) が示され、右ページにはそれをリーダーブルに成形した本文 (reading text) が示されているため、「共観版」(Synoptic Edition) とも呼ばれている(詳細は横内を参照)。版元や新聞メディアは本書について「5,000の誤りを正した」(McDowell) や「ジョイスが書いたとおりの『ユリシーズ』」(*Ulysses as Joyce wrote it*) などと商業的に喧伝し、さらにリチャード・エルマン (Richard Ellmann) とヒュー・ケナー (Hugh Kenner) らジョイス研究を牽引する大家たちも *UCSE* の意義を大きく評価した。1986年にはこの *UCSE* の右ページの本文のみを抽出し、以降「ガブラー版」の通称で呼ばれることになる一般読者向けの商業版ペーパーバック「訂正版」(*The Corrected Text*) が米国ではヴィンテージ・インターナショナル³から、英国ではボドリー・ヘッド社とペンギン社から発売される。出版社や新聞メディアがプロモーション上同書を「決定版」と呼んだことも手伝って、それまで誤りを含みつつも標準テキストとして使用されていたボドリー・ヘッド版(1960)やランダムハウス版(1961)に代わり、ガブラー版が新しい「標準」になり得る道が開けはじめていた。

しかしながら、この新しい「決定版」に強い批判を向けたのが、当時32歳でヴァージニア大学高等研究センター(The Center for Advanced Studies at the University of Virginia)に所属していた研究員ジョン・キッドであった。すでに1985年4月2日の時点で、ワシントン・ポスト紙が『ユリシーズ』をめぐる戦争」という記事で、やがて展開されることになるキッドの論戦を予告していたが、4月26日にニューヨークで開催された編集文献学協会(The Society for Textual Scholarship)で、キッドは“Errors of Execution in the 1984 *Ulysses*”を発表し、草稿や初版の扱いの不徹底さや異文の表示方法の複雑さ、テキスト上の重要な記号の再現性の低さを含めて、*UCSE*の難点や誤りを多く数え上げた。キッドの論文は発表に先駆けて「地下出版物のように」各所で回覧されていたこともあり、ガブラーは準備済みの反論を読み上げて応答した(Wollaeger, 87)。4月29日には、ワシントン・ポスト紙の表現に影響されたのか、テキストの完全な再現をめぐる議論がこれまでも行われてきたことを踏まえ、「それは常に世代間の戦争なのです」(“It’s always a war of generation”)という専門家の声がニューヨーク・タイムズ紙で紹介されている(Wilkerson)。以降、大御所専門家と若手研究者の世代間闘争も反映しながら、多くのジョイス研究者を巻き込む形で、*UCSE*の校訂版あるいは「決定版」の編集方法をめぐる論争が繰り返されていく。

マイケル・グローデン (Michael Groden) によれば、『戦争』が本格的に始まったのは1988年6月のことだった(235)。6月12日～18日にヴェネツィアでは国際ジェイムズ・ジョイス・シンポジウムが開催されており、フリッツ・セン (Fritz Senn) がガブラー版をめぐるパネルを企画し、ガブラーとキッドを招待していたが、キッドは会場に現わ

3 1954年アルフレッド・A・クノップフによって設立されたペーパーバックを専門とするヴィンテージ・ブックスは、1960年4月に米国のランダムハウスによって買収された。現在はペンギン・ランダムハウス社の出版グループの一部となっている。

れなかった。その代わりに、後日 *New York Review of Books* (以下、*NYRB* と略記する) 誌に掲載されることになるガブラー版を批判する文章が会場内や街角で「香水のサンプルのように」数千部単位で大量に配布され、キッドは不在にしてそのパネルを支配したという (Grodén, 236)。6月30日、その批判文である“*The Scandal of Ulysses*”が公表され、キッドは共観版を「偽造された記録」、「不十分な複製の研究」と呼び、出版社に「訂正版」の販売取り止めを提案している。8月18日号の *NYRB* 誌上では、ガブラーの主張にはじまり、ジョン・アップダイク (John Updike)、ロバート・M・アダムズ (Robert M. Adams)、ロバート・クラフト (Robert Craft)、キッドらがそれぞれの意見を表明。キッドは100年後の未来の2088年で架空の書籍である「ジョイス戦争選集」(*Selected Papers of the Joyce Wars*) の編纂主幹を務める「未来教授」(Professor Futura) を登場させ、皮肉や揶揄を交えてガブラー版とその他の論者を批判した。12月8日には、ロスマンが“*The New Ulysses: The Hidden Controversy*”を *NYRB* 誌上で発表し、学術諮問委員 (Academic Advisory Committee) であったエルマンの書簡を暴露し、ガブラー版の妥当性を保証するために設立された当の委員会内部の不和を明らかにした。

翌1989年2月には、マイアミで“*Ulysses: The Text*”と題して集中的な討議が行われ、キッドは、170頁超の論文として公開される“*An Inquiry into Ulysses: The Corrected Text*”をもとに発表。初の直接対決になるかと思われたが、ガブラーは直接的な応答は避け、キッドの主張全体を精査後に回答するという返事にとどめた (O'Toole, 417)。SN誌の1990年夏号では“*Editing Ulysses*”と題した特集が生まれ、ロスマンはその序で1985年の発表によって「キッドが5年間にわたって激しく練り広げられることになる論争の火蓋を切った」(Rossman, “Introduction,” 114) とし、それまでの論戦を整理するためにもガブラー版刊行以降の英語圏における100以上の論争関連文献を網羅的にまとめた注解付き書誌を掲載している。同誌にはキッドの論文と、その主張を強い口調で全面否定する当時のガブラーの応答も再掲された。ガブラーはその応答に追記を付して「5年を経て振り返ってみても、私の反論は強い苛立ちの調子を帯びていた。その口調は当時、聴衆を不快にさせた。ただ今日の読者であれば、専門的なテキスト学者の学会に持ち込まれたアマチュアの批評が、その苛立ちをかなりの程度引き起こしていたことは容易に理解できるだろう」(Gabler, 1990, 255) と述べた上で、「[1985年時に反論した際の]『ドクター・キッドの論文から、『ユリシーズ』の訂正版を変更するものは何も生じていない』という私の結びの言葉は... [中略]... 当時熱くなっていたことによる言い過ぎで」(256) とあり、1986年の *UCSE* 第2版では数点の改訂を行ったことを認めている。

こうして侃侃諤諤の議論が交わされるなか、「新しい標準」になるかに見えたガブラー版に翳りが見えはじめる。米国の版元のランダムハウスは、論争の真偽を問うべく1988年に社内で調査委員会を組んでいたが、結局結論に至らず、1990年には、1961年版の再版とガブラー版の併売という妥協策に転じ、1993年にはペーパーバックのボドリー・ヘッド版に「ガブラー版」という副題を付して販売するようになった。その前年にはイギリスでも、ペンギンブックス社がガブラー版のペーパーバックの刊行を取りやめ、ボドリー・ヘッドの旧版の再版へと切り替えた (Rossman, 1989, 155; Grodén, 237) (現在ランダムハウスによるハードカバー及びヴァンテージ・ブックスによるペ

ーパーバック版『ユリシーズ』が中古本でしか入手できない現状はこうした経緯にもとづくと考えられる)⁴。一方キッドは自身の編纂版の出版計画を進め、1991年にはW・W・ノートン社と包括契約を結んだ。しかし1992年のダブリン国際シンポジウムで行われた基調講演でキッドは、期待されていた新校訂版の方針の提示を回避し、ジョイスの著作からの100の引用と、40人のジョイス研究者からの引用を継ぎ合わせたコラージュを披露するのみで、次々と会場から去る呆れた聴衆の反応を得るだけであったという(Wollaeger, 93)。キッド版が刊行される気配は一向になく、彼がボストン大学で設立していた「ジェイムズ・ジョイス研究センター」(James Joyce Research Center)の活動も以降失速していくことになる。

スプーが1997年の論文で「10年戦争」として論争を回顧するなかで述べているように、キッドの“Inquiry”の論文が1990年に『アメリカ書誌学会誌』(*Papers of the Bibliographical Society of America*; 以下、PBSAと略記する)に掲載されたときには、ジョイス研究者たちの関心はすでに衰えはじめており、また1993年6月号のPBSA誌にガブラーによる本格的応答“*What Ulysses Requires*”が掲載される頃には、「この論争はすでに歴史的な出来事の趣を帯びはじめていた」(Spoo, “Preparatory,” 110)。実際、1990年以降に状況は沈静化し、文学研究の関心は理論から文化研究へ、さらに「アーカイヴの回帰」へと移行していた(Lernout, 229–30)。また、1996年頃からはジョイス作品のハイパーメディアテキスト化への動きが出はじめており(Groden, 240–41)、ガブラー版をめぐる議論は次第に批評紙面で影を潜めていった。1997年にキッドは、ダニス・ローズ(Danis Rose)編纂の*Ulysses: A Reader's Edition*の書評“*Making the Wrong Joyce*”をNYSRB誌上で発表し、ガブラー版のときと同様に、多くの誤りを指摘して酷評している。しかし、スプーが同書評に触れながら「初期の『ジョイス戦争』におけるジョン・キッドのレトリックの選び方は、建設的な議論を荒廃させ、混乱させるものだった」(“Preparatory,” 432)と述べているように、その皮肉交じりの苛烈な言葉の選択は生産性をもつ学術的な議論には繋がらない印象を与えていた。

キッドの論壇上の振る舞いに批判が向けられていくなか、1999年から2000年にかけてはジョイス研究センターも閉鎖され、キッド自身も学術界から姿を消していく。以降報道では、いずれも物語化するようなレトリックとともに、「奇人」としてのキッド像を描く記事が散発的に現れる。例えば1997年のオブザーヴァー紙では、映画のタイトルを踏まえた「ジェイムズ・ジョイスと風変わりな教授」(“James Joyce and the Nutty Professor”)という記事が書かれている。記者のウォレン・シン・ジョン(Warren St. John)は44歳のキッドに取材を行いながら論争の経緯を冷静に振り返る一方で、「キャンパスで怪我をしているネズミ、ハト、さらにはミミズを助けに行くことで知られている。ある時、キッド氏は病気のアヒルを連れてオフィスに現れた」といった奇行を目立たせる逸話を紹介し、「傷ついた動物を見たら、きみはどうする？ ただ通り過ぎるだ

⁴ ロスマンは「私がこれを書いている1988年9月現在、ガブラー版『ユリシーズ』は商業的な覇権を握っている。現在イギリスやアメリカで出版されている唯一の版である」と述べたあとで、その地位がキッドの攻撃により揺らぎ始めていることを指摘している(1989, 155)。現在この覇権は市場的には奪われており、ガブラー版は入手困難となり、膨大な低品質のリプリント版に埋没している。

けか？」という発言を引用し、愛護主義的にジョイスのテキストを救済しようとする姿を重ねている。2002年にはボストン・グローブ紙が「栄光からの転落」(“A Plummet from Grace”)と題して、学术界から孤立し、ハトに餌を与える写真とともに体調不良と貧乏を抱える49歳のキッドの現状(“Now, Kidd is broke, jobless, and in such poor health”)を報じている(Abel)。2018年にはニューヨーク・タイムズ・マガジン紙でジャック・ヒット(Jack Hitt)が、「失踪したジョイス学者の奇妙な事件」(“The Strange Case of the Missing Joyce Scholar”)の記事で、ホームレス生活や死去の噂がささやかれていた氏の消息を掴み、リオ・デ・ジャネイロに在住している65歳のキッドに取材を行っている。インタビュー内では、ボストン・グローブ紙による破産の記述やレムニックの記事が事実と異なっている点に憤慨していることにはじまり、今でも文学研究に没頭し、ブラジルの作家Bernardo Guimarães (1825–1884)による『奴隷イサウラ』(*A Escrava Isaura*, 1875)の英訳とその解説書の出版準備を進める様子が語られている。以降、キッドに関する報道はなされていないが、彼の新版刊行の停滞と学术界からの引退に合わせて、この「戦争」は次第に過去のものとなり、今ではジョイス研究史の一時代として回顧されるエピソードとなっている。

2. レムニックのレトリック—「ジョイス戦争」にみる軍事的メタファー

ガブラーとキッドの対立にはじまる論争は、「ジョイス戦争」というスキャンダラスな名前が与えられたことで、『ユリシーズ』の研究史上では繰り返し引用されるエピソードの一つとなっている。前節でも説明したように、その契機となったのは、ヴェネツィアでの国際ジョイス・シンポジウムに先立って公開された、1985年4月2日付けのワシントン・ポスト紙の記事『「ユリシーズ」をめぐる戦争」(“The War over *Ulysses*”)であった。記事を執筆したディヴィッド・レムニックは、1982年に同紙に入社し、1988年にはモスクワ特派員となり、1994年には同支局での経験をもとに執筆した著書『レーニンの墓—ソ連帝国最期の日々』(*Lenin's Tomb: The Last Days of the Soviet Empire*, 1993)でピューリッツァー賞を受賞している。1998年からは『ニューヨーカー』誌の編集長を務めた。1985年の記事は、彼がモスクワ赴任の直前、スクープを狙う若手記者として活動していた時期のものである。本節では、レムニックが用いているレトリックと軍事的メタファーを分析した上で、「戦争」という語彙の選択をキッドの言葉から着想した可能性に加え、当時の文芸ジャーナリズムの常套句を流用していた可能性を明らかにする。

レムニックはまず記事の冒頭で、当時32歳の「大胆不敵な若手の学者」ジョン・キッドによる「国際ジェイムズ・ジョイス研究の巨人たち(titans)に対する戦い(battle)」を提示する。ロスマンも指摘するように、「キッドを神話的な存在として提示し、文学的エスタブリッシュメントに立ち向かう『巨人殺しジャック』として」描きだしている(1989, 165)。それは典型的なダヴィデとゴリアテの闘いの構図でもあるが、レムニックは学問的権威や潤沢な資金を誇る大御所研究者たちとの対比を際立たせることも忘れず、キッドが「医学校近くの質素なワンルーム・アパート」に暮らし、旅行やジョイス旧版購入のために1万ドルの借金を抱え、「ヨーロッパ旅行の資金を得るために800冊

の蔵書と家具を売却し、13年落ちの車に乗っている」清貧の生活を送る姿を強調する。そして「私に残されているのはジョイスの本だけだ」という発言を引用した上で、資金や地位に恵まれた「巨人たち」との対照を読者に印象づけようとする (Remnick, “The War,” B1)。

同記事は続けて、「私の言うことはジョイス研究の体制に風穴を開けることになるだろう」 (“... blow the whole Joyce establishment wide open”) という爆弾発言を紹介する。そしてガブラー版刊行の経緯に触れつつ、『ユリシーズ』は当初性急に出版され、ジョイス自身も完全に修正しなかったため、「コンマ、ピリオド、スペルミスのすべてが依然として論争の種となり得る」とし、ジョイス研究者が句読点やその他の些末な言語上の問題をめぐって議論を戦わせる様子を“wars”として描き出す (“Joyceans see nothing arcane or funny about wars waged over punctuation and other linguistic nits”; 強調は筆者)。翌年にも予定されているガブラー版のペーパーバック刊行を機に、こうした“war”は終わりを迎えるかに見えたが (“... the wars finally seemed at an end”)、レムニックはキッドが近く開催されるジョイス・シンポジウムで発表予定の同版に対する痛烈な批判によって、「本当の戦争」の勃発を予告する (“This [Kidd’s paper] could all lead up to a veritable war at a Joyce symposium to be held in April 1986 at U-Va.”; 強調は筆者)。レムニックは記事の他の箇所でもこの軍事的メタファーに依拠した記述を行っており、W・B・イエイツ (William Butler Yeats) の詩集の校訂版をめぐる論争に言及する際にも使用している (“recently, a war was waged in the quarterlies over editions of W. B. Yeats’ poems”) ⁵。最終的にレムニックは、『ユリシーズ』に見られる数秘術的パターン⁶の多くをガブラー版が歪めているというキッドの主張を紹介したあと、キッドの異議申立てはジョイス研究内に「大きな騒動」(uproar)を巻き起こすだろうとして記事を結んでいる (Remnick, “The War,” B1, B4)。

以上がレムニックの記事の概要だが、キッド自身が軍事的メタファーを使用して1990年のSN誌の特集号に掲載した論文「ジョイス戦争における最初の砲火の背景」 (“The Context of the First Salvo in the Joyce Wars”) には、このインタビューの裏話と1985年時の研究発表 (“Errors of Execution”) の内容が学会に先立つ三週間前に出回った経緯が説明されている。長い引用となるが、レムニックの記事が生まれた経緯とキッド自身の言い分を正確に伝えるためにも、下記にその主張を記す。

5 具体的な論争内容については確認できていないが、1984年4月19日号のクリスチャン・サイエンス・モニター紙には、Richard J. Finneran 編 *The Poems of W. B. Yeats: A New Edition* (1984, Macmillan) の書評が書かれている。イエイツ自身が意図した詩の配列を回復した点が大きな特色とされ、従来読まれていた *The Collected Poems of W. B. Yeats* に代わる、一般読者向けの新しい「標準版」になることが期待されている (Rubin)。タイトルの “New Edition Gives Us Yeats’s Poems as the Poet Himself Intended” (強調は筆者) は、“Ulysses as Joyce wrote it” といった、当時 UCSE に対して用いられた宣伝フレーズと編集文献学的関心を一致させている。

6 例えばキッドは『ユリシーズ』第5挿話でブルームが物体の落下速度を想起する文 “Thirtytwo feet per second, per second. Law of falling bodies: per second, per second” (U5.44-45) が、その文が含まれる段落の32番目に来ていることに数秘術的一致を見ている。

1985年4月2日付のワシントン・ポスト紙がなぜ「ユリシーズをめぐる戦争」(号によっては“Jolting the Joyceans”)という大々的な報道を、“Errors of Execution”が発表される3週間も前に掲載したのかを訝しむ声がある。ジョイシアンたちの噂では、私が自分の研究を積極的にメディアに売り込んだということになっている。しかし実際には私は、ワシントン・ポスト紙やニューヨーク・タイムズ紙がニューヨークでの大会に先立って記事を出そうとする試みに強く抵抗していた。ワシントン・ポスト紙が私の研究を知ったのは、ガブラーと長年の知己でありながら、新しい『ユリシーズ』には欠陥があると確信していたある司書からだ。その司書は、ワシントン・ポスト・ブックワールドが、私が発表する予定だった編集文献学協会の会合について報じる意向があると考えていた。しかし残念ながら、かなり学術寄りのブックワールド向けの情報が、華々しい作家、あるいは悪名高い作家に関する記事を専門にしている同紙の「スタイル」面の若手記者デイヴィッド・レムニックの手に渡ってしまったのである。必死にスクープを狙っていたレムニックは私に電話してきたが、[キッドが所属していた研究拠点があったヴァージニア大学のある]シャーロットヴィルにまでインタビューに来ることは認められないと答えた。彼はなぜ駄目なのかと尋ねてきた。そこで私が行った返答—「私の言うことはジョイス研究の体制に風穴を開けることになるだろう」—が後に私の写真のキャプションになってしまったのである(それは取材拒否の一環としての発言であり、当然オフレコだと考えていた)。私は「問題があまりにもデリケートすぎる」(“The issues were too volatile”)と伝え、ニューヨークの大会への参加を勧めた。すると彼は強い口調で言った—「(ニューヨーク・タイムズ紙の)ハーブ・ミットガングやエド・マクダウエル⁷にこの話を先取りされるわけにはいかないのです」(同日中に実際マクダウエルから電話があったが、私は彼の取材も断った。その結果、3年後の1988年6月15日の記事⁸まで、彼は私の研究について記事を書くことはなかった)。二日後、レムニックは—その粘り強さによってのちにワシントン・ポスト社のモスクワ支局に抜擢されることになるのだが—すでに十分な数のジョイシアンに取材をしているので、記事が48時間後に出れば、きみはかなり愚かに見えることになるだろうと告げてきたのだ。私はレムニックに屈した、のちにボリス・エリツィンがそうしたように。(Kidd, “The Context,” 238)

「私はレムニックに屈した」の部分は曖昧だが、キッドがコメントや取材に応じなければ、記事は他のジョイス研究者たちの言葉だけで構成され、結果的に彼が貶められる内容になるのを恐れた、ということだろう。ここでキッドは、自分が「積極的にメディアに売り込んだ」という噂を否定しながら、自分の言葉で語るためにも、最終的に仕方

7 1984年6月7日にニューヨーク・タイムズ紙で“New Edition Fixes 5,000 Errors in *Ulysses*”を書いた記者エドウィン・マクダウエル(Edwin McDowell, 1935–2007)を指す。1978年から2004年まで同紙に記事を寄稿した。

8 マクダウエルがブルームズ・デーの前日の6月15日にニューヨーク・タイムズ紙に掲載した、同論争を紹介する“Corrected *Ulysses* Sparks Scholarly Attack”を指す。

なく取材に応じたのだと弁明しているようである。

真偽はともかく、レムニックの記事とキッドの言い分を併記したいま、「戦争」という言葉がどこから出来たかに関心を向けてみたい。実に、レムニックに答えるキッドの言葉には、“... *blow the whole Joyce establishment wide open*” (強調は筆者) や “The issues were too *volatile*” (強調は筆者) として、すでに爆弾や爆発、炎上のイメージが入り込んでいるが、レムニックはキッドのこうした発言から「戦争」の語彙を記事に持ち込んだのだろうか。その可能性も否定しきれないが、以下で考察するように、そのような軍事的メタファーは当時の文芸ジャーナリズムが扇情的に出来事を描き出すために依拠した典型的なレトリックの一部でもあったことも認識する必要がある。

例えばレムニックはキッドの記事公開から4ヶ月後の8月19日付の記事で、再び軍事的メタファーを用いた「批評家たちの戦場」(“The Critic’s Battlegrounds”) を執筆している。同記事は、多くの崇拜者と無数の敵を生み出したハロルド・ブルーム (Harold Bloom) を、「アメリカで最も悪名高い文芸批評家」と形容し、その驚異的な読書力や記憶力を持つ博覧強記の研究者を紹介しながら、学界内外からの賛否両論を織り交ぜつつ描き出している。インタビュー中に読書をするブルームを描写するときには、その発言を引用しながら「ブルームにとってそれ[読書]は『防衛戦争の一行為』(as an act of defensive warfare) であって、決して受動的な営みではない」と書き、批評家が戦う戦場の光景を前景化している。記事の後半では、『ハムレット』第三幕第一場の有名なフレーズを用いながら「ブルームは再び学術誌の批判の矢面に立たされていると感じている」(Once more, Bloom feels the slings and arrows in the pages of the academic journals) とも書いているように、レムニックという記者は慣用的な軍事的メタファーを好んで使用するのである (Remnick, “The Critic’s Battleground,” C1-2)。

同記事でさらに注目すべきは、ブルームが所属するイエール大学を「もっとも物議を醸す学部」と紹介したあと、当時同大学に在籍して脱構築を実践していた批評家たち—ジェフリー・ハートマン (Geoffrey Hartman)、ジョン・ホランダール (John Hollander)、J・ヒリス・ミラー (J. Hillis Miller)、ジャック・デリダ (Jacques Derrida)、そして故ポール・ド・マン (Paul de Man) — に対して、「イエール・マフィア」(the Yale Mafia)⁹ という呼称を紹介している点である (Remnick, “The Critic’s Battleground,” C2)。「イエール・マフィア」という徒党を組んで既存の秩序を脅かす呼称がここで重要になるのは、レムニックの記事から遡ること2年前の1983年3月5日、ワシントン・ポスト紙には同じく軍事的メタファーを冠したジェイムズ・ラードナー (James Lardner) の記事「言葉の戦争」(“War of the Words”) が掲載されており、そこでも「脱構築マフィア」(deconstructionist mafia) の表現が使用されているためである。

ラードナーの記事は、脱構築の手法を掲げる派閥をイエール大学に侵略を試みる「エイリアンの宇宙船」などと形容し、その晦渋な思想や言葉遣いをホラー映画仕立てで風刺的に描くものである。特に1960年代からはじまった「文化戦争」(Cultural

⁹ この表現がいつ誕生したかは定かではないが、類似する “Hermeneutical Mafia” や “gang of four” といった名称と合わせて、ブルーム及び上記の内4人が名を連ねた論集『脱構築と批評』(Deconstruction and Criticism, 1979) に関連していることは確かだろう。

War)¹⁰を通して伝統的な人文学を堅持したハーバード大学のウォルター・ジャクソン・ベイト (Walter Jackson Bate) の脱構築派に対する痛罵—「虚無的で、気まぐれ、必要以上に難解、偉大な文学とゴミを区別できない」—を引用し、上記の理論家たちが保守派から“deconstructionist mafia”や“gang of four”と呼ばれていることを紹介する筆致は、スキャンダラスを好むワシントン・ポスト紙のスタイル面のカラーを色濃く反映している。本文隣に付されたパルプマガジン風の挿絵は人文学と脱構築派の対立を戯画化し、(記事タイトルの“The War of the Words”の明らかな着想源である) H. G. ウェルズの『宇宙戦争』(*The War of the Worlds*, 1898) に登場するタコ型の火星人をモデルにした4本腕の頭部が無毛の学者が人々を襲う様子が描かれている。このような戦争のイメージの利用が、レムニックの記事以前にワシントン・ポスト紙で行われていたのである。実際に、“War of the Words”という表現を同紙のアーカイヴで検索してみると、その記事タイトルは21世紀に至るまで同紙で繰り返し使用されており、ある種のシリーズ記事となっていることが判明する。もちろんそれ以前に使われていた“War of the Words”に類する軍事的メタファーの例はいくらでも見つかるだろうが¹¹、少なくともこれまでの議論から結論できるのは、「戦争」という呼称はキッドによる比喩によって着想された可能性に加えて、文芸ジャーナリズムで使用されていた扇情的な比喩が継承されており、ジョイス研究に固有の文脈と事情から不可避免的に、特異に生まれてきたものではないということである。

また、「ジョイス戦争」という表現自体はレムニックによる発明ではないことも強調しておかなければならない。ブラノンが指摘したように、「『ジョイス戦争』という呼称を初めて印刷物に登場させたのはキッドだった」(116)。彼が1988年にNRYB誌でガブラー版をめぐる論争を皮肉交じりに批判した文章の冒頭で架空の書籍「ジョイス戦争選集」を登場させたときに、その呼称は使われている—

In the year 2088, the general editor of *Selected Papers of the Joyce Wars* has her hands full. She finds the documents (paper, electronic, and plasmic) surviving from 1988 incomplete, contradictory, error-prone, stylistically archaic and a touch comic. Letters in one issue of *The New York Review* keep Professor Futura and her textological lexica busy for weeks.¹²(Kidd, “The Scandal of *Ulysses*”)

10 1999年にガーディアン紙に掲載された訃報記事は、“These [Bate’s inner struggles] were exacerbated by the ‘culture wars,’ beginning in the 1960s, in which differently *educated armies clashed by night*” (強調は筆者)として軍事的な戦闘構図のなかにベイツを配置し、フレンチセオリーや女性・映画・文化研究などの「異邦の神々」(alien gods)としての新潮流に対して伝統的人文学を堅守した学者として紹介している(Krupnick)。ロードナーが記事のなかで「エイリアンの宇宙船」の比喩を用いているのも、この文化戦争内の語彙に影響を受けていると思われる。

11 論争上の対立を「戦闘」に見立てるレトリックは古くから存在する。例えば17世紀フランスにはじまった「新旧論争」を諷刺したジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift) の『書物戦争』(*The Battle of the Books*, 1704)では、多様な軍事的メタファーとともに、図書館所蔵の擬人化された古代派と近代派の書籍同士の合戦が描かれている。

12 かつてジョイスがジャック・ブノワ＝メシャン (Jacques Benoist-Méchin) に述べた言葉—“I’ve put in so many enigmas and puzzles that it will keep the professors busy for centuries arguing over what I meant, . . .” (Ellmann, 521)—を踏まえている。

つまり、レムニックの記事のタイトルに触発されたキッドが、論争を先取りして歴史化するレトリックを用いるなかで、「ジョイス戦争」は誕生していることになる。スティーヴン・ジョイス (Stephen Joyce) が呼んだように、その論争は単なる「学者同士の騒々しい喧嘩」(Amian, 142; Brannon, 121) に過ぎなかったかもしれない。最近アイルランド国立図書館が公開した1986年12月31日にデニス・ドノヒュー (Denis Donoghue) に宛てた手紙によれば、その段階ではキッド自身も、論争を“ULysses wrangle” (原文ママ) と呼んでいた (Donoghue)。しかしその後、文芸ジャーナリズムの伝統的慣用句を継承したレムニックがキッドの発言から論争を「戦争」に仕立て、その「戦争」をキッドが「ジョイス戦争」と固有名詞化し、さらにその「ジョイス戦争」を紹介する研究者が隣接する軍事的メタファーとともにその呼称を批評紙面で拡散してきたことで、紙面には「批評家たちの戦場」の光景が描き出されてきたのである。言うなれば、その呼称はレムニックとキッドが合作し、そしてジョイス研究者が補強してきたレトリックであったのだ。

「戦争」という軍事的メタファーはすでに歴史化されてしまっているために、おそらく今後も一例えば2088年の時点でもジョイス研究のなかで使用されつづけることだろう。本稿が少なからず寄与できることがあるとすれば、すでに人口に膾炙しているその軍事的なメタファーの使用に対して批評的な抑制を働きかけることに加えて、2088年の世界で「戦争」という呼称の起源について調査する「未来教授」たちの忙しさをいくらかでも軽減することにあるだろう。

付録「ジョイス戦争」(Joyce Wars) 関連年表

- 1975 Rosenbach Library から *Ulysses: A Facsimile of the Manuscript* 出版。
- 1977 ガブラーが学術版『ユリシーズ』の作成に着手 (マイケル・グローデンやウォルトン・リッツらが非公式アドバイザーとして協力)。ガーランド社から、ジョイスのほぼすべてのメモ、草稿、手稿、タイプスクリプト、校正刷りを収録した全63巻の写真複製版 *James Joyce Archive* が刊行 (~1979)。
- 1979 ガブラーらによる新校訂版がジェイムズ・ジョイス遺産管理団体 (James Joyce Estate) から出版許可を得る。Hans Walter Gabler, “And Now: *Ulysses* as James Joyce Wrote It: Working on a Critical Edition” (*German Research*) 掲載。
- 1980 8月、Hugh Kenner, “The Computerized *Ulysses*” (*Harper’s Magazine*) ; 10月、Michael Groden, “Editing Joyce’s *Ulysses*: An International Effort” (*Scholarly Publishing*) 掲載。
- 1984 全3巻から成る *Ulysses: A Critical and Synoptic Edition* がガーランド社から刊行。フランクフルトで開催された国際ジェイムズ・ジョイス・シンポジウムでは、同版についてリチャード・エルマン、ヒュー・ケナー、ジェローム・マガンらが肯定的評価を表明。6月7日、エドウィン・マクダウエルの記事 “New Edition Fixes 5,000 Errors in *Ulysses*” (*The New York Times*) 掲載。7月25日、“New Edition of *Ulysses* Illumines Joyce’s Methods” (*Christian Science Monitor*) 掲載。
- 1985 4月2日、“The War over *Ulysses*” (*The Washington Post*) の報道。4月26日、ニューヨークで開催された編集文献学協会で、キッドが “Errors of Execution in the 1984 *Ulysses*” を発表。ガブラーがその場で強硬に反論。5月24~27日、モナコでガブラー版の評価を目的とした初の国際会議 “Assessing the 1984 *Ulysses*” が開催 (翌年に C. G. Sandulescu and Clive Hart, editors, *Assessing the 1984 Ulysses* として刊行)。
- 1986 「コピーテキスト」の手法を採用する編集文献学の研究者ジョージ・トマス・タンセル (George Thomas Tanselle) が “Historicism and Critical Editing” でガブラーの編集上の判断の過剰を理由に痛烈に批判 (Rossman, 1989, 168; Lernout, 234)。
- 1987 Paola Pugliatti, “The New *Ulysses* Between Philology, Semiotics and Textual Genetics” (*Dispositio*) を発表し、ガブラーの編集方法を批判。Jean Kimball, “Love and Death in *Ulysses*: ‘Word Known to All Men’” (*JJQ*) 掲載、“Love passage” の挿入がもつ意義を整理。
- 1988 6月30日、キッドが “The Scandal of *Ulysses*” を *NYRB* 誌に掲載し、典型的な誤りを指摘し、論争が国際的に注目を集める契機となる。8月18日、同誌上でガブラー、ジョン・アップダイク、ロバート・M・アダムズ、キッドらが意見を表明。12月8日、ロスマンが “The New *Ulysses*: The Hidden Controversy” を同誌上に発表し、エルマンの書簡を通じて編集委員会内部の不和を暴露。
- 1989 2月2~4日にかけてマイアミでシンポジウム “*Ulysses*: The Text” が開催され、

- ガブラーとキッドが双方の主張を展開。キッドはその主張を170頁以上の論文にまとめて“An Inquiry into *Ulysses*: The Corrected Text”として、ランダムハウスの委員会に提出し、その後PBSA誌に掲載。同年、1922年初版、1961年ボドリー・ヘッド版、1984-86年ガブラー版を比較検討した Philip Gaskell & Clive Hart, editors, *Ulysses: A Review of Three Texts*が刊行され、ガブラー版には483か所の修正案を提示。Charles Rossman, “The Critical Reception of the ‘Gabler *Ulysses*’: Or, Gabler’s *Ulysses* Kidd-napped” (*SN*) 掲載、論争の経緯を整理。
- 1990 3月、UCSEを評価し助言する学術諮問委員が、委員長でランダムハウス社副社長のジェイソン・エプスタイン (Jason Epstein) と G・T・タンセルの対立により解散。これまでの経緯から信頼性に疑義が生じたことで、ガーランド社の調査委員会がガブラー版を絶版扱いにする方針を示唆。*SN*誌で“Editing *Ulysses*”の特集が生まれ、1985年時のキッドの“Errors of Execution”とガブラーの応答“A Response to John Kidd, ‘Errors of Execution in the 1984 *Ulysses*’”が再掲。ロスマンが関連文献を整理して総括。
- 1991 イギリス人ジャーナリスト、ブルース・アーノルド (Bruce Arnold) が *The Scandal of Ulysses* を出版し、ジョイス戦争を紹介。同書の内容はテレビ・ドキュメンタリー番組としても放送された (McCourt, 212)。キッドが自身の編纂版を計画し、W・W・ノートン社と包括契約を結ぶ。
- 1992 ダブリン国際シンポジウムでキッドの基調講演が行われる。しかし独自刊行版に触れず、コラージュの朗読をするだけの発表を行ったことで、聴衆の不評を買う。
- 1997 ロバート・スプーが“*Ulysses* and the Ten Years War”で論争を「十年戦争」と名付けた上で、真の学問的検討の機会を逸したと総括。W・W・ノートン社からのキッド版刊行の噂が報じられるが、おそらくは著作権上の障害とキッドの健康問題から実現せず。同年、ダニス・ローズがピカドール社から *Ulysses: Reader’s Edition* を刊行するも、専門家からは過度に恣意的、裏づけが乏しいと批判される。キッドも *NYRB* 誌 9月25日号に同書の書評“Making the Wrong Joyce”を発表し、無根拠な改変や誤記を多数指摘。12月29日、オブザーヴァー紙が“James Joyce and the Nutty Professor”と題してキッドを報道。
- 1999 キッド、ボストン大学を離れる。
- 2000 キッドがボストン大学で設立していたジェイムズ・ジョイス研究センターが閉鎖。
- 2002 2月17日、“A Plummet from Grace” (*The Boston Globe*) の報道、ボストン大学キャンパスで鳩に話しかける姿のジョン・キッドを描写し、かつての俊英の凋落を伝える。
- 2006 Geert Lernout, “Controversial Editions: Hans Walter Gabler’s *Ulysses*”でガブラー版をめぐる論争の回顧。
- 2018 “The Strange Case of the Missing Joyce Scholar” (*New York Times Magazine*) の報道。リオ・デ・ジャネイロ在住のキッドを直接取材し、その後の消息を報道。

- 2019 Mark Wollaeger, “Ulysses, Gabler, and Kidd: The Personal Note” (SN) 掲載。
- 2024 UCSE刊行40周年を記念したUlysses *Forty Years: A Critical Retrospective of Hans Walter Gabler’s Critical and Synoptic Edition of Ulysses* 発刊。ガブラー書き下ろしの二つの論考—UCSEの編集理念と成果を回顧した“Ulysses 1984: To Edit and Read in Flow of Composition”と、第9挿話に欠落していた部分の復元経緯と編集的根拠を説明した“Love, yes. Word known to all men” (U9. 429–30) —を収録。

引用・参考文献

- Abel, David. “A Plummet from Grace.” *The Boston Globe*, 9 Apr. 2002. Reposted at *David Abel: Articles & Essays*, 8 May 2005, davidabel4.blogspot.com/2005/05/plummet-from-grace.html.
- Amiran, Eyal. “Rhetorics of Simulation and the 1984 Ulysses.” *Studies in the Novel*, vol. 22, no. 2, summer 1990, pp. 142–47.
- Arnold, Bruce. *The Scandal of Ulysses*. Sinclair-Stevenson, 1991.
- Brannon, Julie Sloan. *Who Reads Ulysses? The Rhetoric of the Joyce Wars and the Common Reader*. Routledge, 2003.
- Donoghue, Denis. “Material Relating to the Controversy between John Kidd and Hans Walter Gabler over Gabler’s 1984 Edition of Joyce’s *Ulysses*, 1985–1991 and [Undated].” National Library of Ireland, MS 51,433/1-16. Catalogue record, catalogue.nli.ie/Record/vtls000888695.
- Ellmann, Richard. *James Joyce*. Rev. ed., Oxford UP, 1982.
- Gabler, Hans Walter. “A Response to: John Kidd, ‘Errors of Execution in the 1984 Ulysses.’” *Studies in the Novel*, vol. 22, no. 2, summer 1990, pp. 250–56.
- . “What Requires *Ulysses*.” *Papers of the Bibliographical Society of America*, vol. 87, no. 2, 1993, pp. 187–248.
- Gabler, Hans Walter, John Updike, Robert M. Adams, Robert Craft, Jon N. Elzey, Beverly Fields, and John Kidd. “‘The Scandal of *Ulysses*’: An Exchange.” *The New York Review of Books*, 18 Aug. 1988, www.nybooks.com/articles/1988/08/18/the-scandal-of-ulysses-an-exchange.
- Groden, Michael. “Perplex in the Pen-and in the Pixels: Reflections on *The James Joyce Archive*, Hans Walter Gabler’s *Ulysses*, and James Joyce’s *Ulysses* in Hypermedia.” *Journal of Modern Literature*, vol. 22, no. 2, winter 1998–1999, pp. 225–44.
- Hitt, Jack. “The Strange Case of the Missing Joyce Scholar.” *The New York Times Magazine*, 12 June 2018, www.nytimes.com/2018/06/12/magazine/the-strange-case-of-the-missing-joyce-scholar.html.
- Joyce, James. *Ulysses*. Edited by Hans Walter Gabler, et.al., Random House, 1986. (『ユリシーズ』本文からの引用は本書を底本とし、省略記号Uに続けて挿話番号と行数を記す。)
- Kidd, John. “The Scandal of *Ulysses*.” *The New York Review of Books*, 30 June 1988, www.

- nybooks.com/articles/1988/06/30/the-scandal-of-ulysses/.
- . "An Inquiry into *Ulysses*: The Corrected Text." *Papers of the Bibliographical Society of America*, vol. 82, no. 4, 1988, pp. 411–584. (大幅な刊行の遅れがあったため [Gabler, 1990, 187]、書誌情報とは異なり、実際には1989年に公表)
- . "Errors of Execution in the 1984 *Ulysses*." *Studies in the Novel*, vol. 22, no. 2, summer 1990, pp. 243–49.
- . "The Context of the First Salvo in the Joyce Wars." *Papers of the Bibliographical Society of America*, vol. 84, no. 2, 1990, pp. 235–43.
- . "Making the Wrong Joyce." *The New York Review of Books*, 25 Sept. 1997, www.nybooks.com/articles/1997/09/25/making-the-wrong-joyce.
- Krupnick, Mark. "Walter Jackson Bate: Literary Historian Who Defended Humanism against 'Alien Gods.'" *The Guardian*, 2 Aug. 1999, www.theguardian.com/news/1999/aug/02/guardianobituaries1.
- Lardner, James. "War of the Words: A New Brand of Literary Criticism Has Scholars Everywhere Up in Arms." *The Washington Post*, 5 Mar. 1983, G1, G10.
- Lernout, Geert. "Controversial Editions: Hans Walter Gabler's *Ulysses*." *Text*, vol. 16, 2006, pp. 229–241.
- McCourt, John. *The Years of Bloom: James Joyce in Trieste 1904–1920*. Lilliput Press, 2000.
- McDowell, Edwin. "New Edition Fixes 5,000 Errors in *Ulysses*." *The New York Times*, 7 June, 1984, C19.
- Nugent, Georgina, and Sam Slote, editors. *Ulysses Forty Years: A Critical Retrospective of Hans Walter Gabler's Critical and Synoptic Edition of Ulysses*. Clemson UP, 2024.
- Nugent, Georgina, and Sam Slote. "The Pertinence of Being Provisional." *Ulysses Forty Years*, pp. 1–14.
- O'Toole, Mary. "Miami in February: A Report on the Conference." *James Joyce Quarterly*, vol. 26, no. 3, spring 1989, pp. 417–24.
- Remnick, David. "The War over *Ulysses*: John Kidd, a U-Va. Scholar, Squares off Against the Much Heralded New Edition of Joyce's Novel," *The Washington Post*, 2 Apr. 1985, B1, B4.
- . "The Critic's Battlegrounds: Obsessions and Opinions, Admirers and Enemies, a Life with the Words of Poets The Wilde Bloom" *The Washington Post*, 19 Aug. 1985, C1–2.
- Rossmann, Charles. "The New *Ulysses*: The Hidden Controversy." *The New York Review of Books*, 8 Dec. 1988.
- . "The Critical Reception of the 'Gabler *Ulysses*': or, Gabler's *Ulysses* Kidd-napped." *Studies in the Novel*, vol. 21, no. 2, summer 1989, pp. 154–81.
- . "Introduction." *Studies in the Novel*, vol. 22, no. 2, summer 1990, pp. 113–18.
- . "The 'Gabler *Ulysses*': A Selectively Annotated Bibliography." *Studies in the Novel*, vol. 22, no. 2, summer 1990, pp. 257–69.
- Rubin, Merle. "New Edition Gives Us Yeats's Poems as the Poet Himself Intended." *The Christian Science Monitor*, 19 Apr. 1984, www.csmonitor.com/1984/0419/041908.html.

- Sandulescu, C. George, and Clive Hart, editors. *Assessing the 1984 Ulysses*. Benjamins, 1986.
- Spoof, Robert. “Ulysses and the Ten Years War: A Survey of Missed Opportunities.” *Text*, vol. 10, 1997, pp. 107–18.
- . “Preparatory to Anything Else...” *James Joyce Quarterly*, vol. 34, no. 4, *Finnegan’s Wake Issue*, summer, 1997, pp. 427–37.
- . “Copyright, Copy-Text, and the Color of the Air,” Nugent and Slotte, editors, *Ulysses Forty Years*, pp. 175–94.
- St. John, Warren. “James Joyce and the Nutty Professor.” *The Observer*, 29 Dec. 1997, <https://observer.com/1997/12/james-joyce-and-the-nutty-professor>.
- Wilkerson, Isabel. “Textual Scholars Make Points about Points in Books.” *The New York Times*, Section B, 29 Apr. 1985, p. 2, www.nytimes.com/1985/04/29/nyregion/textual-scholars-make-points-about-points-in-books.html.
- Wollaeger, Mark. “Ulysses, Gabler, and Kidd: The Personal Note.” *Studies in the Novel*, vol. 51, no. 1, spring 2019, pp. 86–97.
- 横内一雄 「ガブラーの愛、猫の残酷—ガブラー版『ユリシーズ』入門ワークショップ報告」『編集文献学研究』, 第2号, 2025年, pp. 8–16.

※本研究は課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業JPJS00122674991の助成を受けている。

Tracing the “Joyce Wars”: On the Origins of Its Military Metaphors

Yoshimi Minamitani

This paper examines the origins and rhetorical dimensions of the so-called “Joyce Wars,” the heated controversy between Hans Walter Gabler and John Kidd over *Ulysses: A Critical and Synoptic Edition* (1984). While previous scholarship has focused on the textual and editorial principles dividing the two scholars, this study instead explores the linguistic and journalistic operations that shaped the dispute’s public image. Tracing the origins of war metaphors to David Remnick’s 1985 *Washington Post* article “The War over *Ulysses*,” I argue that the military metaphor was not a unique product of Joyce studies but an adaptation of rhetorical conventions already circulating in literary journalism, as seen in headlines such as “War of the Words” (1983) and “The Critic’s Battlegrounds” (1985). Drawing further on Kidd’s reflections in “The Context of the First Salvo in the Joyce Wars” (1990), the analysis demonstrates that Remnick’s “war” imagery was developed through the interplay between journalistic sensationalism and Kidd’s own explosive metaphors and sarcastic rhetoric. By situating these metaphors within a broader media discourse that framed scholarly debate in the rhetoric of warfare, this paper shows how textual criticism itself was transformed into a form of cultural spectacle. Reconsidering this rhetorical genealogy reveals that the “Joyce Wars” arose not only from methodological tensions but also from the transposition of academic conflict into the language of warfare.